Heartful Communication

JAひがしみの

# ひがしみの

10

2019 OCTOBER

Vol.259

特集 トマト研修制度修了生の今

夢農人 ゆめノート Yume Note

中津川市千旦林
松葉 和正さん(70)

# 「地縁」と「血縁」で絆深める

今年度から中津川超特選栗部会の部会長を務める松葉さん。父親から約10年前に引き継いだ栗園23aで筑波や丹沢、利平などを栽培しています。

「父親が他界した時この栗園をどうするか悩んだ。しかし父親が守ってきた栗園を放っておくわけにはいかなかった」と当時を振り返る松葉さん。栽培をはじめた当初は苦労や失敗もありましたが、近くの先輩農家から管理や技術を学び、JAが開催する講習会にも積極的に参加しました。

松葉さんが安定生産のために特に気をつけているのは適期の病害虫防除。恵那農林事務所から提供される情報をもとに、早めの対策に努めます。また、品種の選定では実炭疽病に弱い品種や「モモノゴマダラノメイガ」の幼虫がつきにくい特性の品種などを常に研究しています。

松葉さんが大切にしている信条に「地縁」と「血縁」があります。「地縁」はその土地で出会う豊かな作物や人々との出会い、「血縁」は長く栽培を続けていくために欠かせない家族の存在といいます。「いつも支えてくれる家族には感謝しています」と思いを語ります。

現在は小学5年生のお孫さんに夢中の松葉さん。「可愛くて仕方ない。孫の成長を楽しみに栽培も頑張れる」と思わず顔がほころびました。

## 栗の栄養と効能

栗はデンプンが主成分です。可食部100gあたり130キロカロリーで、白米100gと同程度の熱量。ミネラルなども豊富に含んでおり、バランスがとても良い食品です。

JAひがしみの◆
ふれっしゅ◆
ニュース◆
2019 OCTOBER◆

## 超特選栗出荷
# 選果の徹底呼びかけ

JAひがしみのは9月5日、恵那総合庁舎で「超特選栗」の目揃会を開き、JAや同部会、恵那農林事務所など100人が参加しました。

同部会は東美濃栗振興協議会の専門部会として、現在79戸が所属。「低樹高・超低樹高栽培」や県認証の「ぎふクリーン農業」による施肥・防除などの栽培条件、品種の限定など、栽培や出荷に関わる厳しい規定により、高い品質を確保しています。

今年度は昨年度より1週間遅い出荷となりましたが、生育は順調。目揃会では注意点として、収穫は果実温度が低い早朝に行うことや収穫後は冷涼な場所で保管する事、特に選果の段階では、変形・変色、腐敗臭が無く、硬くて艶のあるものの出荷が呼びかけられました。また、同事務所からは栗園での害虫防除について紹介されました。

基準を確認する生産者

## 思い出が蘇る昭和のメロディ
# 恵南地域 あい・あい会員の集い

田口さん㊨による能トレを楽しむ会員

JAひがしみの恵南地域女性部は9月4日、JA恵南ホールで「昭和を回想しよう！あい・あい会員の集い」と題した交流会を開催し、86人が参加しました。

開会前は食事として地元産の野菜を使ったカレーライスが振る舞われ、スパイスをブレンドしたこだわりのレシピも紹介されました。

交流会では昭和歌謡オンステージとして、福祉施設等にも慰問する「東野三人娘」が仮装姿で昭和の歌と踊りを披露。元教員の田口修さんはクイズや得意の三味線、巧みな話術で会場を盛り上げました。

## 農福連携の取り組み2年目
# クリのイガ拾いで生産者の負担軽減

JAひがしみのや恵那農林事務所などで構成する「東美濃クリ地産地消（商）拡大プロジェクトチーム」が農福連携として取り組む、クリのイガ拾いと収穫作業が9月4日から1ヵ月間行われました。昨年度の作業日数5日間から今年度は1ヵ月に増やし、生産者のさらなる作業負担軽減を目的としています。

クリの収穫作業における高齢の生産者の負担を軽減するため、恵那農林事務所とぎふアグリチャレンジ支援センターが昨年4月に「㈱ライクサポート」に話を持ちかけ、両者のニーズがマッチしました。

作業が行われた栗園の園主は「昨年度の通所者の熱心な仕事ぶりや真面目な姿勢をみて、今年度も依頼したいと思った。」と話します。通所者の伊東直晃さんは「外での作業は働いているという実感がわく。人の役に立てることが嬉しい。」と積極的な姿勢をみせました。

イガを拾う伊東さん

## トマト農家が農高生にエール
# 恵那農高が農家を見学

恵那農業高校の園芸化学科1年生36人は9月17日、農家見学会として、JAひがしみの中津川トマト選果場とトマト農家を訪問しました。

中津川トマト選果場では、JAの担当者から東美濃地域の夏秋トマトの栽培状況や販売について説明を受けた後、選果施設の機械の仕組みや選果後のトマトの鮮度を保つ予冷庫などを見学。

次に訪れた夏秋トマト農家の鷹見豪さんは、質疑応答を交えながら生徒に対し経験談を話しました。「あなたも経営者になれます。将来の職業の選択肢として農業は、自分が経営者となり十分な収入を得ることができる職業です。いつでも相談に乗ります」と生徒にエールを送りました。

トマトのハウス内を見学する農高生

## 阿木高校が青トマトで加工品
# JA職員らが試食会

阿木高校の1年生と2年生6人は9月13日、JAひがしみのを訪問し、職員を対象とした加工品の試食会を開催しました。

同高は熟す前の青い段階で枝から落ちてしまうトマトの廃棄を減らすため、加工品の開発に取り組んでいます。今回の試食会は職員や中津川市の学校に勤める栄養士などから意見を集め、学校給食への提供などへ発展させるため、開催されました。

用意されたのは青トマトのフライと、青トマトのピクルス入りたまごサンドです。

試食後はアンケートの記入や意見交換があり、「美味しかった」「トマトをもう少し感じることができる工夫が欲しい」などの意見が交わされました。

試食する細江成徳専務（中央）と原実好常務

## 飛騨牛輸出拡大に向けトップセールス
# 推奨店認定や覚書締結を実施

岐阜県と県農林水産物輸出促進協議会は9月11日から14日の4日間、メルボルンやシドニーなどオーストラリアの主要都市で飛騨牛輸出拡大に向けたトップセールスを行いました。古田肇知事やJA全農岐阜の足立能夫会長らが、飛騨牛を取り扱うレストランや料理学校などを訪れ、飛騨牛海外推奨店の認定やブランド力強化に関する覚書の締結などを行いました。

今回飛騨牛海外推奨店として、メルボルンの日本食レストラン「NOBU」とシドニーのステーキレストラン「6HEADL」を認定。認定証と銘板を授与しました。また、シドニーの日本食レストラン「SHIKI」へ、飛騨牛や鮎など県産食材をPRしました。

認定証と銘板を授与した足立会長（右）ら

## 取り組み9年目
# 夏秋なす3S栽培研究会

JAひがしみのと恵那農林事務所は9月11日、JA管内の圃場を会場に、第2回夏秋なす3S栽培研究会を開催し、約30人が参加しました。

「3S栽培」は岐阜県中山間農業研究所中津川支所が開発した技術で、土量5リットルの培土をナイロン製の袋「ベルポット」に充填し、土壌から隔離した状態で栽培するものです。土壌病害の回避や同一圃場で連作できることから、省力化と低コスト化も可能です。

研究会では、現地実証圃の栽培管理内容と各種調査データを活かして、給液の肥料濃度や給液方法を見直すとともに、マグネシウム欠乏への対策等を確認しました。

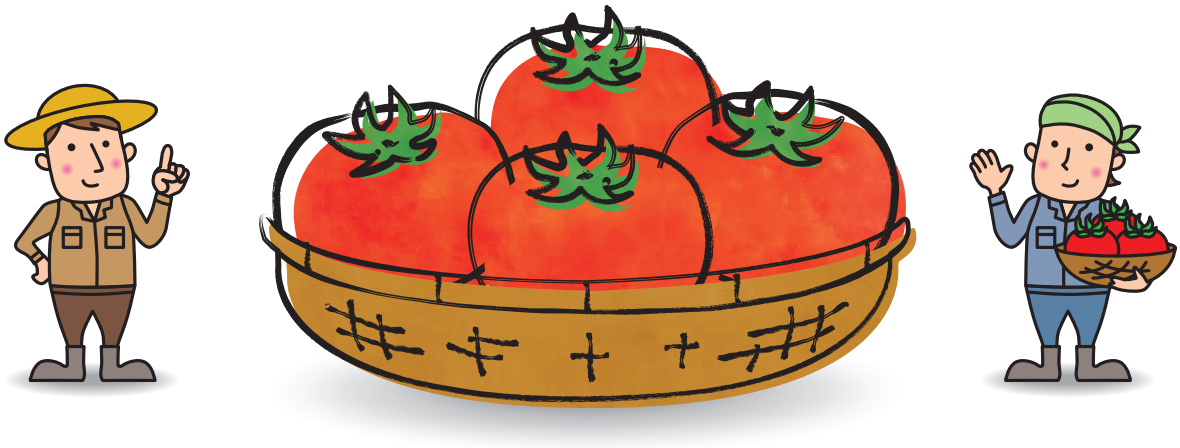
同支所は「この技術は給液濃度と給液回数が重要となる。草勢とともに給廃液のEC値をよく観察し、それらをもとにした栽培管理に取り組んでいただきたい」と話しました。

意見を交換する参加者ら

特集

# トマト研修制度 修了生の今

10月に入り、JAひがしみの管内では夏秋トマトの出荷もいよいよ大詰めです。美味しいトマトをお届けするため、生産者の皆さまは毎日丹精込めて作っています。そんな生産者の中には「ひがしみの夏秋トマト研修制度」を修了した若手の生産者が活躍中! 今回の特集では、卒業した研修生の方々の〝今〟をご紹介いたします。



## トマトのこだわり

### ①トマトは土づくりから

土壌分析を行い、足りない養分を補うことと、良質な堆肥・資材を施し、根の伸びやすい健全な土づくりをすることで、味の濃いトマトを栽培することができます。

### ②ぎふクリーン農業を実施

化学肥料や化学合成農薬の使用を減らした、環境に優しい栽培方法です。

## 研修制度について

ひがしみの夏秋トマト研修制度ではトマトの栽培を希望する方にトマトの生産技術や経営管理等について、実習と講義を中心に研修を行います。また、研修終了後の就農にあたっても生産者・県・市とともに新規就農希望者を支援しています。

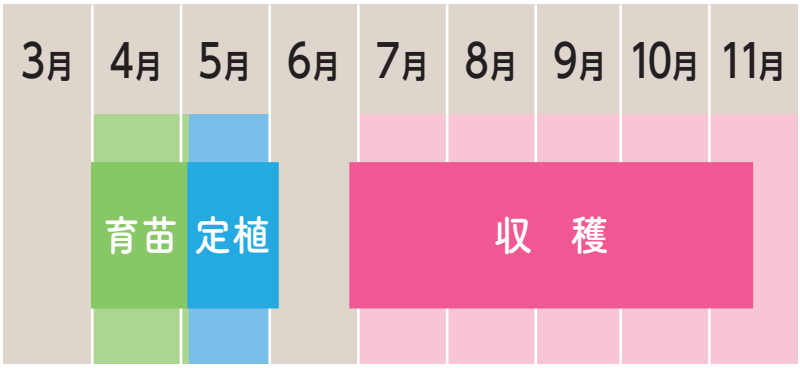
## 研修のカリキュラム

| | |
|---|---|
| 3月 | 移　住 |
| 4月～（2年以内） | **研修開始**<br>準備、育苗、定植、日常管理（芽かき、誘引、施肥、かん水、防除、収穫、出荷）などすべての管理を学びます。基礎知識習得のための座学も受講します。<br>（研修期間は120時間/月前後） |
| 2月 | ハウス建設 |
| 4月 | 就　農 |

**期　間**　最大2年

**内　容**　栽培研修（準備～片付け）、新規栽培者研修会（月1回）

●通常作例




研修受入先は4カ所（中津川市、恵那市に各2カ所）、あすなろ農業塾長所有ハウスが5カ所あります。講師となる生産者の農場に隣接した研修専用ハウスで、トマト栽培の技術を学びます。

要件を満たせば、補助事業の対象となることもできます。

## 講師より一言

鷹見　豪さん（トマト栽培研修農場農場長兼あすなろ農業塾長）

私たちのトマト産地ではそれぞれの農家が「トマト職人」として、誇りをもって栽培に取り組んでいます。農業に魅力を感じ、いざトマト農家を始めたいと決心しても、色んな壁に直面してしまい、不安になったり、たくさんの疑問が次々と出てきてしまうと思います。その不安を解消し、疑問を一つひとつ解決できるように、就農前から積極的にサポートしていきます。そしてそれぞれが自分に合った農業スタイルを見つけだし、その理想を実現できるように全力で応援します。

## 恵那市串原　大上 清文さん（33）

わたしは愛知県名古屋市から串原に移住し、2015年4月に就農しました。きっかけは両親が田舎暮らしに憧れ、串原にあった古民家をリフォームしたこと。私も両親の引っ越しでこの土地をたびたび訪れる内に、豊かな自然に惹かれていました。職を探してみたところ、同じ地区にトマトで生計を立てる生産者と知り合う機会があり、就農を決意しました。就農にあたり、あすなろ農業塾長の農家の元で1年間の研修を受けました。実践技術や経営戦略、流通販売等のノウハウを学びました。

就農当初は1本1本に付きっきりで、他の作業が後回しになり、苦労しました。今では良い意味で力を抜く部分と、念入りにやらなければいけないところの区別がついてきたように感じます。所属している「串原園芸組合」は管内の生産組合の中でもトップクラスの単収を誇ります。これからも栽培に丁寧に向き合い、高単収や省力化の実現を目指しながら、この土地で長く栽培を続けていきたいです。

## 恵那市上矢作町　垣内（かいとう） 裕輝さん（34）

わたしはもともと製造業の技術職として、企業に勤めていました。しかし29歳の時に、興味があった農業をしたいと決意し、退職。出身地である愛知県知多市で大規模農業のアルバイトをしていましたが、もっと自然豊かな土地で営む農業を求めて、JAひがしみのの研修農場で2年間研修し、上矢作に移住しました。

独立した当初は試行錯誤の連続でした。しかしやりたいことを追求するのはサラリーマン時代にはできなかったこと。失敗も楽しみながら、日々経験を楽しんでいます。

夏秋トマトは昼夜の寒暖差によって実が美味しくなるため、この地域はトマト栽培にとても適した場所だと思っています。また、こちらに移住して、農業にも生活にも欠かせない水が想像以上に綺麗なことに驚きました。最近は若手のトマト農家が増えており、若手農家で集まって意見交換をするなど、新規就農しやすい地域だと感じます。地元の方にはいつも親切にしていただき、充実した生活を送っています。

## 中津川市蛭川　田口 雄大さん（28）

わたしは恵那農業高校を卒業後、東京農業大学へ進学しました。4年間の大学生活では主に野菜、中でもトマト栽培を専攻し、研究や実習に励みました。その後は青果物の卸売会社や全農の新規就農者の研修施設で勤めていたところ、地元でトマトの栽培をしたいという思いが強くなり、JAの研修制度に応募しました。

研修先の農場長である鷹見豪さんは熱心に丁寧に指導して下さいました。研修中は収穫して出荷して管理という日々の作業の多さに追いつかないこともあり苦労しました。1年間勉強させていただき、今年度就農しました。

作業の遅れを心配し、蛭川夏秋トマト生産組合の方々や若手の生産者のみなさんに手伝っていただき、本当に感謝しています。

JAへの出荷とともに産直も行っています。JA蛭川支店ではオリジナルのPOPとともに販売する中で、名前を覚えて頂けることも多く、「美味しかった」と生の声を聞けるのがとても励みになっています。

現在研修中!

## 恵那市上矢作町　西尾 祐哉さん（29）

大学卒業後は淡路島で造園等を学び、建設関係の会社に就職しました。その後3年前に地元へUターンしました。実家で親の手伝いとして米づくり等を行ううちに、農業に興味を持ち、各地で開催されていた就農に関する説明会に参加しました。新規就農者の交流会でハウスの見学や話を聞く中で、JAの研修制度を知り、入所しました。

現在は研修2年目です。石川トマト農園でお世話になっています。代表の石川右木子さんは農業で地域の活性化や地域おこしに積極的に取り組んでみえます。また、論理的に指導して下さるので、一つひとつの作業の意味、目的を明確に学ぶことができます。石川さんのもとには若い従業員の方が多いため、話しやすく相談にのってもらえる、心強い存在です。

来年度からは実家である阿木で就農を予定しています。栽培技術の向上を目指し、規模拡大に向けての経営基盤を確立させることを目標にしています。また、近年注目されている「農福連携」にも興味があるので、これから勉強していきたいです。

# 田んぼや畑にもみ殻をまこう！

ＪＡの乾燥調製施設では、毎年多くのもみ殻が出ています。
もみ殻には有効的な使用方法がたくさんあり、その一部をご紹介します。

## もみ殻に期待できるさまざまな効果

### ●畑の地表の保温効果

寒い時期に畑の地表を覆い保温する目的で使われます。藁（わら）も良く使われます。

### ●畑の地表の保湿効果

夏の間など、種まきの後に地表が乾燥しないように使われます。

### ●硬い土壌に混ぜ込んで通気性アップ！

もみ殻の主な成分はケイ酸です。窒素、リン酸、カリといった肥料成分は微量しか含まれておりませんが、農産物を育てる上で、土壌の柔らかさは重要です。硬いと根腐れ等が発生する場合もあります。空気や水の通り道ができるので、土が柔らかくなり根張りをよくします。ぜひ利用しましょう。

### 【代金】

ＪＡではもみ殻を無償でおゆずりしております。ぜひご利用下さい。
（※運搬費等は別途発生する場合がございます。）

### 【問い合わせ・引渡場所】

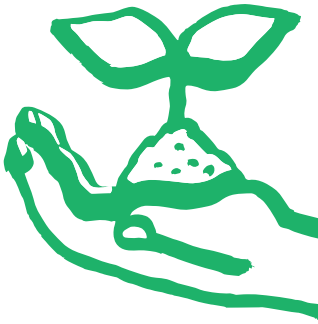
ＪＡひがしみの　各カントリーエレベーター・ライスセンター
（ライスセンターが稼働していない時期（12月～翌年８月）は、最寄りのアグリセンターへご連絡下さい。）

営農部
営農販売戦略課
柘植 健太

「美濃コシヒカリ」は、4年連続（H27～H30）で日本穀物検定協会の食味ランキングで、特Ａを取得しました。美濃地域といっても、東濃から西濃まで広域にわたっています。コシヒカリは、美濃地域の中でも特Ａ地区、Ａ地区、Ｂ地区に分けられ、販売・精算されております。

コシヒカリ　1等（概算金単価）

| 特Ａ地区 | Ａ地区 | Ｂ地区 |
|---|---|---|
| 中津川市<br>恵那市<br>郡上市<br>瑞浪市 | 不破郡<br>いび川地区<br>白川町<br>東白川町 | 美濃地域の<br>その他地区 |
| 13,400円 | （▲648円）<br>12,752円 | （▲864円）<br>12,536円 |



### 令和元年産米概算金単価表【特A地区】

単位：円/60kg紙袋

| 制 度 | 品 種 | 年 産 | 特 等 | 1 等 | 2 等 | 3 等 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| JA米 | コシヒカリ | 令和元年 | — | 13,400 | 13,076 | 11,996 |
| | | 平成30年 | — | 13,100 | 12,452 | 11,372 |
| | ひとめぼれ<br>あきたこまち | 令和元年 | — | 11,800 | 11,476 | 10,396 |
| | | 平成30年 | — | 11,500 | 10,852 | 9,772 |
| | あさひの夢 | 令和元年 | — | 11,700 | 11,376 | 10,296 |
| | | 平成30年 | — | 11,400 | 10,752 | 9,672 |
| | その他うるち<br>（銘柄品種） | 令和元年 | — | 11,100 | 10,776 | 9,696 |
| | | 平成30年 | — | 10,800 | 10,152 | 9,072 |
| | ひだほまれ<br>五百万石 | 令和元年 | 15,400 | 14,752 | 12,916 | 11,836 |
| | | 平成30年 | 15,400 | 14,752 | 12,916 | 11,836 |
| | たかやまもち | 令和元年 | — | 15,000 | 14,352 | 13,272 |
| | | 平成30年 | — | 15,000 | 14,352 | 13,272 |
| | ココノエモチ<br>その他もち | 令和元年 | — | 11,000 | 10,352 | 9,272 |
| | | 平成30年 | — | 11,000 | 10,352 | 9,272 |

※ＪＡ米・一般米格差　△648円
※うるち・もち米１・２等格差　△324円　２・３等格差　△1,080円
※酒造好適米特・１等格差　△648円　１・２等格差　△1,836円
　２・３等格差　△1,080円
※出来秋契約　△432円（当初契約なし）
※水分格差　△432円（13.０％未満）
※集荷時期格差（うるち米）　２月以降　△1,080円
※集荷時期格差（酒造好適米・もち米）　１月以降　△1,080円
※カントリーエレベーターでの価格は袋代がないので上記より
　172円安くなります。（包装格差）
※その他銘柄品種　いのちの壱・キヌヒカリ・はなの舞・
　ミルキークイン・ヒノヒカリ・夢ごこち・ミネアサヒ・縁結び

# 土作りのポイント

10月に入り、少しずつ気温も低下し、肌寒い季節となりました。これから冬の休閑期に入ると、空き畑が多くなります。来年に備え、土づくりをしましょう。

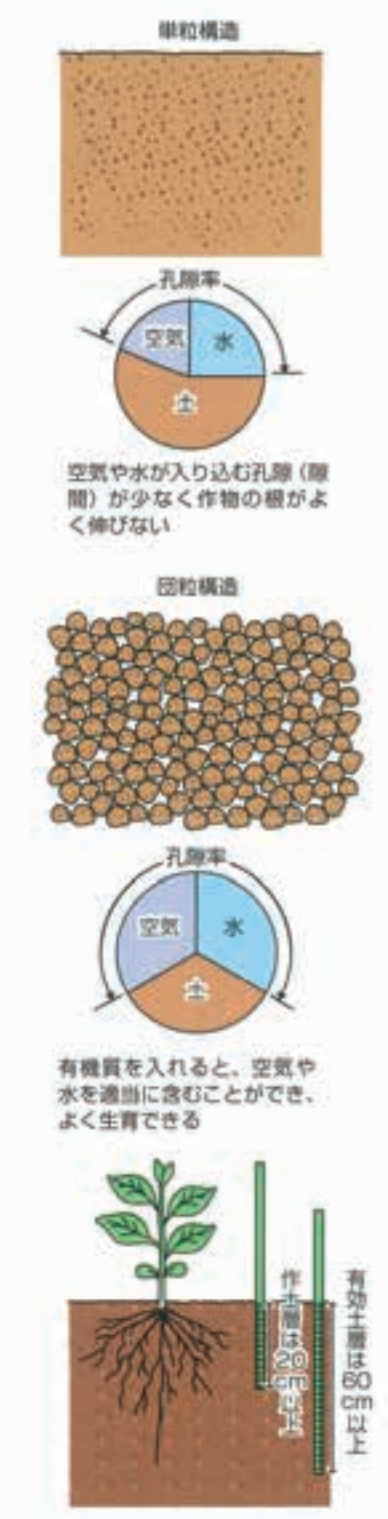
野菜の根が健全に伸びるには

(1) 水はけと通気性が良いこと

(2) 水持ち(保水力)が良いこと

が重要な条件となります。

土には細粒の粘土と、粗粒の砂の割合が異なる団粒構造と単粒構造があり(図参照)、団粒構造にすると孔隙率が高く、空気や水を適度に含み根がよく伸びますが、その状態も数年野菜を作り続けると、痩せて単粒構造となり、孔隙(隙間)が少なくなり根があまり伸びなくなってしまいます。




土を団粒構造にするには、良い粗大有機物(堆肥、緑肥、ピートモス、ココピートなど)を十分に施し、深く耕すことが必要です。

根が深く広く張るためには深層まで条件を整えることが大切ですが、その目安として、直径8～9㎜の棒を畑の土に挿した時、あまり力を入れずに入る作土層が20㎝以上あることです。力いっぱい挿し込んで測る有効土層が60㎝以上あれば、申し分ありません。

畑起こし、粗大有機物入れの時期は寒冷の冬が最適です。それは、他の作業が少なく、畑が空いていることだけでなく、掘り起こした下層の土を厳しい寒気にさらし風化させることにより物理性が改善され、病原菌や害虫、雑草の種子を死滅、軽減する効果が大きく発揮されるからです。

作業の手順としては、前作の残りかすや病害虫の被害株・残根などをきれいに取り除き、堆肥などの粗大有機物を畑全面にばらまいてから耕運します。深耕する場合には先に畑起こしをしてから、次の耕運時に堆肥などの粗大有機物を施すのが良法です。耕した土はなるべく表面に凹凸があるままにしておき、寒気に触れる面を大きくしておきます。

土壌の酸性度も冬の間に調べてph6・0～6・5程度に調整しておくことが大切です。酸性を改良する消石灰の施肥量は砂質あるいは腐食の少ない土壌では少なくてよく、黒ボク土では多くを要するので、施用量を誤らないようにすることも大切です。毎年むやみに与え過ぎると弊害を生じる恐れがあります。